

『LGBTQ+&かもしれない人のための就活・就労・キャリア in 静岡』レポート

10月1日(水)に、『LGBTQ+&かもしれない人のための就活・就労・キャリア』をテーマにしたオンラインセミナーが開催された。今回は、参加者として拝聴した静岡大学 LGBT サークル所属の門脇がレポートを担当する。

セミナーの概要は以下の通りである。

① 「LGBTQ+学生の就活・就労・キャリアについて」

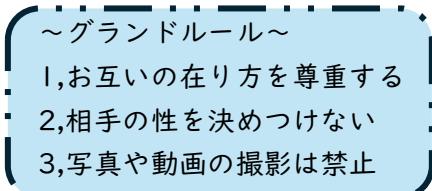
岩崎徳子 先生

②体験談・活動紹介

grandiose(静岡大学 LGBT サークル)

ぱらそる(常葉大学 LGBT サークル)

ゲスト



今回の対象者は、「LGBTQ+やそうかもしれない大学生・大学院生」ということで、LGBTQ+当事者が就活をする時の力になるような内容であった。

① 「LGBTQ+学生の就活・就労・キャリアについて」

岩崎先生は、キャリアコンサルタントや公認心理師の資格を有し、大学やその他団体でキャリア、LGBTQ+について相談員や調査等を行われている。講義では、現在の就職に関する状況やキャリア形成に大切なことを解説された。

最初に説明されたのは、現在の就職活動についてである。LGBTQ+当事者に関わらず、全ての就活生に関することとして、就活の開始時期やどのように準備していくべきか、が曖昧になっているという現状がある。さらに、就職してからのキャリア形成を、会社にしてもらうのではなく、自ら行う必要がある現代において、就職先を選ぶときも、「自分のキャリアを作れる組織はどこか」を考えることが求められている。「キャリア」という言葉については、車輪が通ったあとの轍を表し、通ってきた道、さらにはその先のことをも表すように広がってきている。「ライフ・キャリア・レインボー」についても説明があり、「労働」だけではないキャリアに目を向けることの大切さが語られた。さらには、このように規範的なキャリアが示される際、卒業や就職、結婚、出産、子育てなど、様々なイベントについて、この通りにはいかない、その通りに歩みたくないといった多様性について描かれなしが問題となっていることも示された。

これを踏まえて、LGBTQ+の当事者が特に抱える困難さについて、「自己分析が難しい」「自分を見つけるのに時間がかかる」ことが挙げられた。それは、自分のことを話す機会が無かったり、自分自身について嘘をつかざるを得なかったりすることが原因の一つになる。また、当事者特有の困難さとして、キャリア資本(ビジネス資本、社会関係資本、経済資本)の観点も示された。当事者は、これ

らについて、服装、性についての説明の必要性、他者との関係の築きづらさ、治療や手続きに関わる費用など、本来は背負わなくていいはずの不利益を被っている。しかしそれは、本人の中にある問題ではなく、社会のシステムがそのように動いてしまっているからである、というお言葉をいただいた。

そんな中で、キャリアを形成していくために、大きく、情報と自己分析という二つに必要性が示された。

企業がLGBTQフレンドリーであるかを示す指標は様々あり、具体的にどのような取り組みが行われているかをまとめたサイトもあるという。しかし、そのように掲示された情報だけでは、実際に働き始めた際にどのような環境に置かれるかはわからない。隠れた良い会社もあれば、掲示されていてもハラスメントが起こってしまうような会社もあるということである。情報を集めるだけでも、当事者の安全性が危ぶまれることもあるので、キャリアセンターに間に入ってもらうというような対策も考えられる。会社を見極めるポイントとして、LGBTQ+に限らず、人権の尊重にどのように向き合っているかも重要である。このような会社の本質を知る方法としては、「オープンカンパニー」や「インターンシップ&仕事体験」などがあり、会社内の取り組みを提示していこうという動きは年々広がっている。

自己分析をどのようにしていくか、については、自分の中で変わるものと変わらない/変わりにくいものに目を向けることが有効であると示された。変わりにくいものとしては、性格や行動特性といった「性質」があり、変わりにくいものと変わりやすいものが混在しているものとしては、「価値観」や「興味関心」が挙げられる。一方、「能力」は、発達段階や環境、経験によって変わる。これらを踏まえて、何をもって「合う」とするのか、自分がどんな未来を望むか、どんなふうに生きていきたいかという「自分の軸」を意識することが大切である。また、方法として、他者や過去の自分、特定の集団、想像する未来の自分との比較等があるが、比較対象が異なるとわかることも違うため、組み合わせることが必要になる。

就職において、知っておくべきこととして、自分の「無理」の範囲が挙げられた。自分がスーツを着ていられる時間のような物理的時間と、〇年後に誰といたいのか、どこにいたいのかという心理的時間の二つについて、自己理解を進めておく必要がある。現在は、人材流動性が高くなっているため、働き始めてからでも新しいことに挑戦しやすくなっている。だからこそ、他者の話を聞く中で、自分がどんなキャリアを描きたいかを考えていくことが大切である。

②体験談・活動紹介

まずは、静岡大学LGBTサークル・grandioseに所属する学生が、トランスジェンダー女性として生きる中で感じた就職活動の困難さについて実体験を語った。人によって、状況によって変わるということを前提に、時系列に沿って悩みが示された。

最初に、grandioseとは、静岡大学のLGBTサークルで、当事者・非当事者に関わらず参加できる。今年で創立から十年となる。活動としては、週に1~2回のランチミーティング、学内や学外に展示する掲示物の作成、居場所事業への参加が主である。直近の大きな活動として、静岡のおまちにある企業と共に、LGBTQフレンドリー企業MAPを作成した。

彼女は、就職活動に入る前から、どのような服装で臨むのか、どこまで明かして就職活動を行うか、といった様々な悩みがあったと話す。実際に面接に出向いた際にもどう見られているかという不安は尽きない。無事に最も希望していた企業に内定をもらえたあとも、研修期間のトイレやシャワーに関して男性として生活しなければならないこと、健康診断で治療のことを話すかどうか、と悩んでいた。これらの経験を通して、「トランスジェンダーとして就職活動をすることには困難がある、しか

し、不可能なことではないので、皆さんことを応援しています」と力強いエールが述べられた。

次は、常葉大学 LGBT サークル・ぱらそるから 2人の学生が話をした。

ぱらそるは、常葉大学の LGBTQ+サークルであり、昨年の十一月より活動をしている。「傘で日陰をつくって居場所になりたい」という思いから、サークル名がつけられた。大学生活を送る中で、LGBTQ+が不可視化されていることに問題を感じ、月に一回のお話会や展示作成を主な活動として、居場所づくりや思いの発信を行っている。grandiose と合同で Ally(アライ)のためのグッズ作成も行った。

ぱらそるからは、四年生の二人がプレゼンターとして参加し、実体験や感じたことを語った。

1人目は、地元である静岡県で福祉系の職に就きたいと考えているが、そもそも選択肢が少ないことが課題と感じたという。また、説明会のような場において、就職してからの「結婚」や「子育て」についての話題が出た時、サークルについて設立のきっかけを聞かれた時に、自分のセクシュアリティを明かさずにはかして伝えたという経験が話された。それは、伝えた情報が瞬時に社内で共有されてしまうという経験をしたことによる、不安からであった。まとめとして、就職活動においてカミングアウトをするかどうかはとても難しい問題であり、今後も悩み続けると思う、と語った。

2人目は、面接において、当事者であるということに直接言及はしないものの、所属するぱらそるが当事者サークルであることを伝えた経験を語った。本人はとても緊張していたが、実際に話してみると、「どのように立ち上げたのか」といった質問をされ、自分自身のことに興味をもってもらえたことが嬉しかったと話す。当事者であることは、ネガティブに働く面も多いが、一方で、そのことによって気付けた自分の強みや、偏見無く他者と向き合えることのように、ポジティブな面もある。そのことに、就職活動を通して気付くことができ、自分の自己肯定感にもつながったと語った。

最後に、同性カップルで里親として子どもを育てる社会人の皆様からお話をいただいた。

はじめに、司会者である白井先生より、キャリア形成において、同性カップルで子どもを育てるということの現状、そしてそれをイメージしても良いということが説明された。

三組の方々から、それぞれ就職活動をしていた時の考え方や現在の職場環境についての話があり、カミングアウトをしたうえで働いている方もいれば、子育てしているということは伝えて、同性カップルであることはカミングアウトする必要がないと判断している方もいた。それでも、子育てに関して周りと変わらぬ支援を受けたり祝福を受けたりと、困っていることはないと話す。その中で、カミングアウトは必ずしなければならないものではなく、信頼できる人が見つかった時に、そっと話すだけでもよいというお話もあった。大切なのは、セクシュアリティや目先のことに囚われてしまうのではなく、十年後、二十年後といった未来を見据えて人生設計をすることである。自分が譲れないことを深堀していくことが大切と話した。

また、別の方で、カミングアウトのタイミングについて、仲良くなってしまったからこそ、受け入れてもらえたかったらどうしよう、という不安があったため、子育てが始まるタイミングで入った会社では、あえて最初に全員に明かしたという方がいた。それにより、子育てしやすい勤務形態や周囲からの支援を適切に受けることができ、家族も仕事も大切にした働き方ができていると話す。さらに、異性カップルでも里子を迎えるということにはリスクがあり、家族に何かあった時に、子どもを守れるかどうかは重要な点である。そうなった時、オープンに話しておくことで自分たちのことを知ってもらい、一人でも多くの味方がいた方が自分たちにとってプラスに働くと考えたと話した。どんな自分になりたいか、どんな夢を抱いているのか、がゴールになるので、それを考えていくことが良い結果をもたらすと語った。

また、就職した先で、自分のセクシュアリティについて悩み、働きやすい環境がなかなか見つからなかったため、自ら起業したという方もいた。その方は、「環境は自分で創り出すこともできる。就職だけがすべてではなく、他の選択肢もある。」と力強く話す。さらに、働く会社はもちろんのこと、生きていく場所も自分で選ぶことが大切だという。社会が変わってきたとはいっても、地方にはまだ偏見や嘲笑する態度が色濃く残っているところもあるが、首都圏ではそれはかなり改善してきている。自分が主役の人生であるので、「自分で選ぶ」ことでプレッシャーに負けずに楽しく歩んでいけるのではないかと話した。子育てに関して、自分で会社を経営することで自由が利く反面、替えが利かない存在でもあるという問題があるが、里親になるための期間を通して、社内の制度を見直し、皆が働きやすい職場に近づいた。しかし、やはりすべての会社がそうとは限らないので、事前リサーチが大切になるというアドバイスもいただいた。

【参加して】

今回のセミナーに参加して、普段は聞くことのできない、当事者の皆様が抱える苦悩を聞くことが出来てとても勉強になった。また、私自身、教員を目指していることもあり、就職に関しての情報やそれがLGBTQ+の方々にどのように影響するのか、について触れる機会があまりなかったので、初めて知ることばかりであった。ここで得た情報は、今の自分にはもちろん、将来、当事者の子どもを受け持つこともあると思うので、キャリアについて、LGBTQ+について、今後さらに学び、その時に活かしていきたい。

まず、岩崎先生のお話を聞いて、印象に残ったところは、キャリア形成において、社会制度や企業と向き合う前に、自己理解の時点で当事者は苦しんでいるということである。非当事者にとっても、自己理解は簡単なことではなく、自分のやりたいことが見つかず苦しむことが多い。しかし、当事者にとっては、非当事者のそれよりもはるかに難しいことを感じた。日常から、嘘をつかなければならなくなったり、本当の自分を隠し続けていたりすると、無意識のうちに、隠さなければならないような本来の自分が間違っていると思いこんでしまうことがある。それは、その時には必要なことであっても、いずれ辛くなってしまうことであると感じる。全ての場面ではなくとも、自分らしくいられる場所を確保しておくことが大切であると考えた。また、就職するにあたって、自分に「合う」企業を探すためには、まず自分のことを知る必要がある。そのためには、信頼できる他者との会話が必要不可欠だと考へるので、そんな時にgrandioseのような場が自分を見つけることのできる場になりたいと強く感じた。そのためには、ぱらそるさんもおっしゃっていたように、参加者の安心感が大切になると考へる。改めて、居場所の大切さを感じ、活動への意欲にもつながった。

次に、当事者の皆様のお話を聞き、同じ国に住んでいても、セクシュアリティはもちろん、場所によっても何が壁になるのかは変わってくることを感じた。就職活動や会社において、理解してくれていないと捉えられる発言は、人によっては明確な拒絶の場合もあるかもしれないが、ただ、知識がない、知らないだけの可能性もあると考えている。実際、私も、知らないことが原因で人を傷付けてしまった経験がある。変わってきた社会であるが、それに追いつくためには今回のようなセミナーに、当事者だけでなく、その周りの人も積極的に参加することが大切になるのではないかと考えた。そして、当事者とひとくくりに言っても、セクシュアリティが違えば、求めていることや困っていることも異なる。互いを尊重して働きやすい、生きやすい環境にするために、「知る」ことは重要な一步である。このことを、改めて確認することのできる機会にもなった。

学生だけでなく、実際に働いていたり子育てをしていたりしている方々といった、違う年代、環境の人が同じテーマに関して考えていることを共有できる場というのはなかなかないので、今回のように

なセミナーがもっと増えていいかと感じたし、私たちのサークルでも、学生と社会人が繋がることのできる活動には積極的に取り組んでいきたい。

企画してくださった白井先生、講義をしてくださった岩崎先生、忙しい合間を縫ってお話をしてくれた当事者の皆様、貴重な機会をありがとうございました。（門脇）

【講師・岩崎徳子先生からのメッセージ】

ライフキャリアの観点も含んだ、LGBTQ+やそうかもしれない学生に向けた企画は初めてで大変貴重な機会でした。

体験談を聞かせてくださった学生そして里親のみなさま、質問くださったみなさま、白井先生をはじめ企画にかかわってくださったすべてのみなさまに感謝いたします。

大学でのキャリア支援ではどうしても就職活動だけに目がいきがちですが、長い人生のなかをどのように生きていくのかともに考える機会があることは、ロールモデルが少ないマイノリティにとっては重要な場になります。

ぜひ一度きりで終わらずに、静岡大学の中でこうした機会が続いていくことを願っています。